唐様建築の起源と発展に関する研究

（要約）

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号：D152932

氏　　名：晏　鈺

和様と唐様（禅宗様）は中世以降、日本の社寺建築に使われてきた二大建築様式である。

本論文は、そのうちの唐様の起源と発展経緯について、従来の見解を根本的に再考するも

のである。唐様は十三世紀末期に南宋の浙江省周辺から伝来した建築様式と言われている。そこで十三世紀末期から十五世紀前期における初期の唐様建築の現存例の規模形式や細部意匠を網羅的かつ詳細に分析することにより、中国建築をそのまま模倣した様式ではなく、また従来の研究で本格的と評価された唐様仏殿の形式が唐様の主流ではなかったことを述べたい。そして、唐様の成立は和様や天竺様（大仏様）の建築様式とも深く関わっており、特に和様の影響が大きいので、唐様建築の現存例を規模形式によって二系統に分類し、その起源と発展に関して研究したのが本論文である。

序章では、先行研究の問題点と研究の経緯及び研究の目的・方法を述べる。

第一章は、唐様建築の研究の前提として、和様と唐様の再定義を行い、それに基づいて唐様建築の各部の形式や意匠について詳細な検討を行うものである。第一節では、唐様仏殿の柱間寸法決定法について検討する。唐様仏殿は斗栱を詰組にするのが主流であるが、斗栱を等間隔に配置した例は建築年代が下がる。そして、裳階付唐様仏殿では、裳階の軒裏を平行垂木にする場合、円覚寺舎利殿を除き、他は全部枝割が成立している。功山寺仏殿は当初の裳階形式が不明であり、十四世紀前期の山口県域においては枝割による柱間寸法決定法が応用されていないと推測される。したがって、唐様が成立した時期において、中国の手法は伝来せず、従来の和様の柱間寸法決定法をそのまま応用し、後世になって日本人が好んだ整備感により、斗栱間隔を統一するアイタによる柱間寸法決定法が現われた。そして、十五世紀前期になると、二種類の柱間寸法決定法が同時に応用され、融合する傾向にあると考えられる。

第二節では、唐様の天井形式について検討する。本体の中心部に方一間鏡天井を張り、その周囲の一間通りを化粧屋根裏とする形式が本格的な唐様仏殿と評価されてきたが、本体を一面の鏡天井いわゆる総鏡天井を張る唐様仏殿は、現存例の半分ほどを占めている。

来迎柱の後退によって、虹梁の長さ及び本尊と天井の位置などをより合理的な構造にするために、総鏡天井張りにしたと考えられる。中国では北宋から藻井天井が大流行するのに対し、密教本堂である大善寺本堂の外陣が母屋を鏡天井張りにし、その周囲の庇を化粧屋根裏としている形式は、唐様仏殿の内部構造とより類似している。そして、斗栱間隔を等しく配置しなければ、従来の格天井や組入天井を張ることができない。安楽寺八角三重塔の初重では、総鏡天井を折り上げた形式にしていることから見ても、中国の藻井天井の手法が伝来していないことが推測できるので、唐様仏殿の方一間鏡天井・尾垂木尻架構の祖形は密教本堂にあり、和様新派で発生した鏡天井が唐様建築の意匠となったと考えられる。この二つの天井形式が唐様仏殿を和様系と中国系に分類する重要な基準となる。

第三節では、唐様建築の低い板敷の床について検討する。伝来した中国建築の様式が全部土間式であるのに対し、平安時代中期から隆盛になった阿弥陀堂は堂内に低い板敷の床を張り、天竺様にも影響を与えているので、唐様建築にある低い板敷の床も和様の影響と考えられる。低い板敷の床を張った唐様建築では、必ず堂内に総鏡天井を張っているので、和様系唐様仏殿の一つの重要な手法である。時代が下がると、総鏡天井張りにした例は土間式となるので、和様系唐様仏殿が中国系唐様仏殿と融合する傾向が見られる。

第四節では、軒の形式と軒の反りについて検討する。古くから本体を扇垂木にして、裳階を平行垂木にした例が多く、これ以外の板軒と大疎垂木にした例も少数例とは言えない。平行垂木は柱間寸法と深く関わっているが、他は中国建築の隅扇垂木を改変した意匠か、もしくは古い和様建築にすでに使われた手法である。いずれにしても、純粋な中国建築の手法ではない。平安時代中期から日本建築の丸桁は四角形が一般的となったので、両国の軒を反り上げる方法が完全に異なっていく。永保寺観音堂には丸桁の隅部に生頭木という中国建築の部材が見られるが、それ以外はほぼ和様の手法にしている。

第五節では、三大建築様式の斗栱について検討する。唐様と和様の斗の向きは異なっている。肘木の形式では、唐様と天竺様はいずれにしても中国建築の意匠を受け継いでいなく、天竺様から発展した可能性がある。秤肘木の種類と使用方法の差異によって、斗栱形式も大きく相違している。厳島神社五重塔に応用された菱支輪は中国に実例が残っていて、純和様の例に応用されたのも江戸時代になってからであるので、当時において、中国建築の手法として認識されたと考えられる。

第六節では、尾垂木について検討する。従来の見解では、三手先の場合について二本の尾垂木を用いたため、その架け方を A 型と B 型に分類し、両者には年代差がなく、地域差であるとする。一方、中国では尾垂木を内外とも一木となす下昂、先端を出さない上昂と、尾垂木の先端を肘木から造り出すもしくは肘木に挿す仮昂に分類している。現存例を見ると、上昂を下昂と平行に用いる A 型が圧倒的に古い。鑁阿寺本堂で二本の上昂が角度を持って架けられているのは、斗の間隔を全部統一しているからで、整備された傾向が見られる。他の唐様仏殿では、このように尾垂木尻に載せている斗まで間隔を統一することが見当たらないので、時代が下がる。総鏡天井張りにした延文二年（一三五七）の普済寺仏殿では、一本の下昂を用いている。その他、唐様仏殿で仮昂を用い始めたのは、十四世紀末期から十五世紀前期にかけての B 型の円覚寺舎利殿になってからである。広島県に所在する安国寺釈迦堂でも、上昂が下昂と角度を持って架けられている。さらに、二手先でありながら、二本の尾垂木を用いる例がある。したがって、上昂と仮昂の架け方に明らかな年代的な発展が見られる。

第七節では、唐様の虹梁袖切について検討する。袖切は二種類に分類できる。一つは斜めに直線的に切った傾斜型であり、もう一つは端部から水平に切り、途中から円く下端へ達する円型である。傾斜型の袖切を用いた最古の例は文永元年（一二六四）の東大寺法華

堂礼堂である。それ以後、密教本堂において傾斜型の袖切が主流となった。善福院釈迦堂の海老虹梁両端にある袖切は、巻斗の形状に沿って直角に切られている。後の山口県の地方色である折線型の袖切より古くて、これからの影響とは考えられないので、円型袖切の源となる意匠であると思われる。さらに、永保寺観音堂の海老虹梁では、頭部分を傾斜型の袖切にし、尻部分を円型の袖切にしている。それ以後の唐様仏殿では、袖切を一つの意匠に統一する傾向が見られる。

第二章では、東大寺法華堂礼堂を含めて、密教系本堂について検討する。東大寺法華堂礼堂の細部意匠と棟札及び廃止された樋から見ると、文永元年（一二六四）の建立と考えられる。虹梁両端に傾斜型の袖切を施しているが、当時において唐様がまだ成立していないので、この手法は先駆唐様と考えられる。長弓寺本堂では虹梁の長さが三間になっているが、途中で支柱を施しているので、虹梁の限度は二間と考えられる。そして、大善寺本堂と同じく柱を省略しているが、斗栱や蟇股によって減柱しているので、唐様仏殿の減柱造の祖形であると考えられる。大善寺本堂の外陣構造も唐様の方一間鏡天井・尾垂木尻架構の祖形であると考えられる。鑁阿寺本堂の側廻斗栱は応永の改造であることが判明し、外陣の減柱造は唐様からの影響であると考えられる。

第三章では、十三世紀末期から十五世紀前期にかけての唐様仏殿について個別に詳細に検討する。唐様仏殿は和様系唐様仏殿と中国系唐様仏殿という二系統に分類できる。いずれにしても発生的に古くて、その間に明らかな時代差がない。そして、中国系唐様仏殿において、完全に中国建築に倣って建てられたものがなくて、和様系手法を平面規模から細部意匠まで、多少なりとも取り入れている。時代が下がると、二系統の手法が影響しあい、融合する傾向が見られる。その間の差異が次第に縮小しているが、完全に統一されることはない。さらに、中国系唐様仏殿と和様系唐様仏殿の数はほぼ同じであり、どちらかが主

流となったことはないので、中国系唐様仏殿を典型的と評価するのは不適切である。

第四章では、唐様の塔について個別に検討する。総鏡天井を張る場合では、低い板敷の床を張って、廻縁も張る形式にすると考えられる。安楽寺八角三重塔の天井形式では、和様系手法に基づいて藻井天井を模倣した結果、総鏡天井を小さい斗栱構造によって折り上げたと考えられる。現在和様の技法と思われる菱支輪は、伝来した十四世紀後期から十五世紀前期において、中国建築の手法と世間に認識されていた可能性が非常に高い。意匠上の問題により、和様の蛇腹支輪と併用し、後世になって純和様の手法として扱われたと考えられる。

結章では、唐様建築の規模形式及び細部意匠を検討した結果について総括する。唐様建築は、中国建築のほかに、密教系本堂において祖形が見られ、和様からもかなり影響を受けている。そして、建築年代が古い例では、中国系手法と和様系手法の境は明白につけられるが、時代が下がると、中国系手法は日本人の美意識により日本化され、意匠を統一する傾向が著しい。和様系手法においても中国系手法と融合していく傾向が見られる。二系統の手法が互いに影響しあい、その間の境は曖昧になっていく。いずれにしても両者ともに発生的に古くて、明白な時代差が生じていない。後世になっても、二系統の唐様仏殿は完全に融合して一定した形式にもならず、中国系と和様系の二系統のままに近世まで至ったと言える。